

令和6年度

病害虫発生予察特殊報(第3号)

令和6年12月20日
神奈川県農業技術センター

病害虫名：クロテンコナカイガラムシ（学名：*Phenacoccus solenopsis* Tinsley）
作物名：ハウレンソウ

1 発生経過

令和6年10月、県内の施設ハウレンソウにおいて、コナカイガラムシ類の寄生とハウレンソウの萎縮等被害が確認された。寄生している成虫及び幼虫を採集し、農林水産省横浜植物防疫所に同定依頼した結果、本県ではこれまで未確認のクロテンコナカイガラムシと同定された。

2 形態および生態

雌成虫は翅がなく、体型は楕円形で、体長は約3～5mm。背面に白色のロウ質物を分泌し、全体としては白く見えるが、ロウ質物が薄くなる部分があり、2齢幼虫以降は2対の黒斑があるように見える（図1）。雄成虫は1対の翅を持つ（図2）。

雌成虫は、ワタ状のロウ質物の卵のう内に平均350個程度産卵する。卵の多くは雌成虫の体内でふ化し、卵のう内で数日間過ごした1齢幼虫は、その後歩いて分散する。雌では2齢幼虫、3齢幼虫を経て成虫となる。雄では2齢幼虫の終わりに繭を作り、繭の中で前蛹、蛹を経て羽化する。繁殖様式は、交尾後産卵する有性生殖と雌成虫が交尾せずに産卵する単為生殖の両方が知られている。本種の単為生殖個体群における1世代の発育期間は平均70日程度である。

3 被害および分布と寄主植物

(1) 被害

本種は寄主植物の葉、葉柄、茎、花芽及び果実に寄生する（図3）。吸汁により寄主植物を衰弱させる（図4）他、分泌した甘露（糖分を多く含む排泄物）が植物体表面のすす病菌を繁殖させ、寄主植物の光合成能力を低下させる。

(2) 分布と寄主植物

国内では、平成21（2009）年に沖縄県で初めて発生が確認された後、これまでに21府県で発生が確認されている。

広食性で、66科の植物に対して寄生することが報告されている。令和6（2024）年現在、国内ではトマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、オクラ、ズッキーニ、キュウリ、スイカ、ハウレンソウ、食用キンギョソウ等の他、発生ほ場内のスベリヒユ、キク科雑草への寄生も確認されている。

4 防除対策

(1) 令和6年11月現在、ハウレンソウで本種に登録のある防除薬剤はない。

(2) 生長点付近の茎葉を観察し、本種の寄生の早期発見に努める。分泌された甘露によるすす病は、早期発見の目安となる。発生を確認した場合は寄生株を除去して、土中に埋めるなど適切に処分する。

(3) スベリヒユ等の雑草にも寄生するため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。



図1 クロテンコナカイガラムシ雌成虫



図2 クロテンコナカイガラムシ雄成虫



図3 ホウレンソウ葉に寄生した成幼虫



図4 本種の吸汁により衰弱し萎縮したホウレンソウ

神奈川県農業技術センター 病虫害防除部
〒259-1204 平塚市上吉沢1617
TEL 0463-58-0333 FAX 0463-59-7411
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/cf7/cnt/f450002/>